

第1章 市場の理論

消費者と生産者との間の取引が市場においてどのように調整されるのか？

必要な情報は**価格のみ**

← 需要と供給の関係で動いて調整してくれる

1.1 需要

市場メカニズムの前提条件

(1) 完全競争市場とは

消費者や生産者が**プライステイカー**として行動する場

→ 価格は外から与えられたものとして受け入れて行動する

(条件)

- ・ 取引される財の同質性
- ・ 買い手、売り手は小規模で多数
- ・ 財についての情報が完全 ← 価格や品質など
- ・ 市場への参入、退出が自由

利潤 $\pi > 0$

例題

(金谷・吉田「グラフィックミクロ経済学 第2版」P17,P19,P25より)

1. 以下の産業において、財の同質性が成り立つものは？
 - レストラン
 - ガソリンスタンド
 - 理髪店
 - 衣料品店
 - 自動車産業

2. 以下の産業は、情報が完全か、不完全か？
 - 医療産業 価格は一定 but 質は異なる？
 - ホテル サービスの質は異なる？

3. 参入・退出の自由が保証されない産業の例
 - ▪ 特許で保護された製品の市場 → (例) 医薬品
 - 政府の許認可によって参入が規制されている産業
 - 既存企業が独占的な行動をおこなっている場合 など

↓

(例) かつての鉄道、 航空、 タクシー、 銀行など

→(例) かつての電力、 ガスなど

(2) 個別需要曲線

最適な組み合わせ
は1つだけ

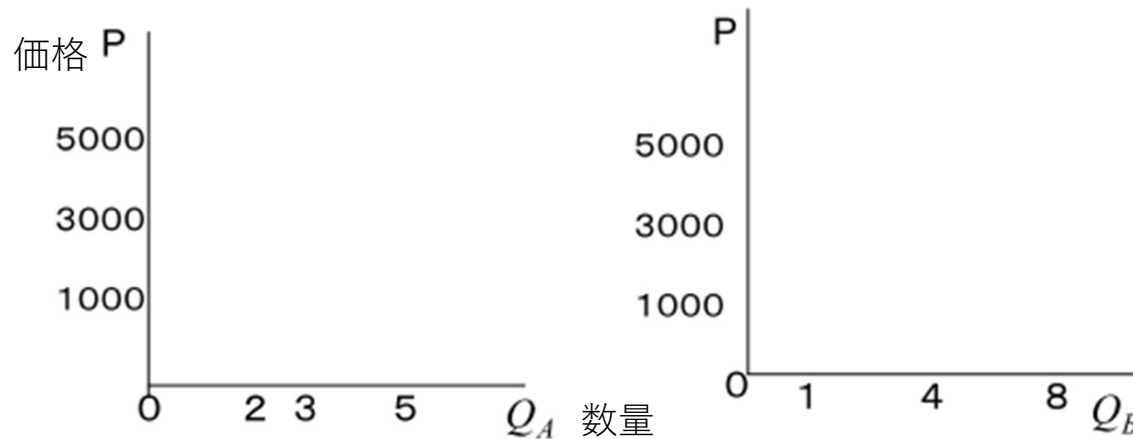
ある個人にとっての、価格と消費量の最適な組み合わせを示した曲線

(例) イセエビ市場の消費者の行動を考える

市場

{ Aさんにとってのイセエビの個別需要曲線
Bさんにとっての

(通常は)



(3) 市場需要曲線

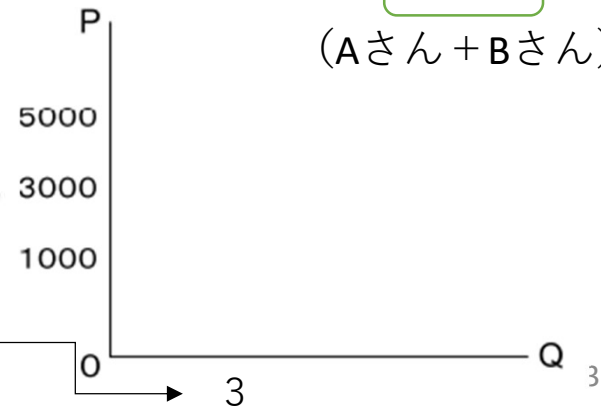
市場に参加する**買い手(需要者)全体**の需要曲線

→ 個別需要曲線を**水平方向**に足し合わせたものになる

- ・ より緩やかになる
- ・ 右下がり

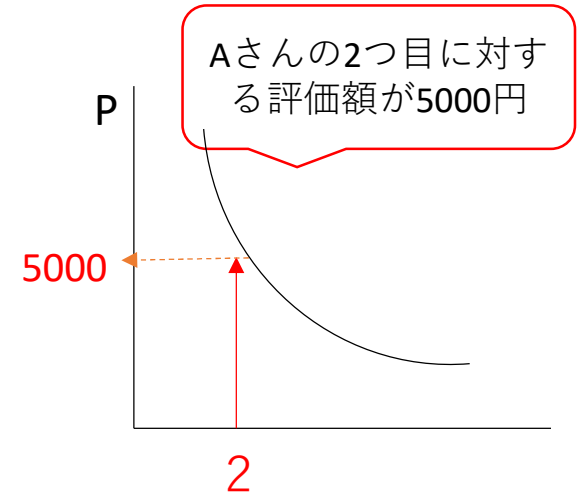
(例) P : 5000円 のとき

Aさん : 2個
Bさん : 1個



**(4) 需要曲線本来の意味
(限界効用理論)**

需要曲線の縦の高さに意味がある
 → 消費者の評価額を示す
 (最高でいくらまでなら支払ってもよいか)

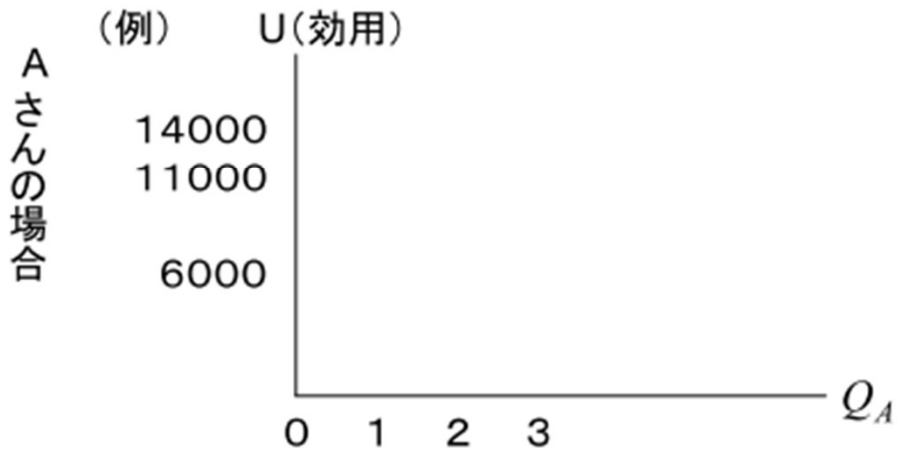


前提 満足度が数値化できる()
 but 本来は
 主観的なもの

単純化して
 1効用 = 1円とすると・・・

正確には「総便益曲線」といわれます

自分の満足度を金額で評価して示すと？

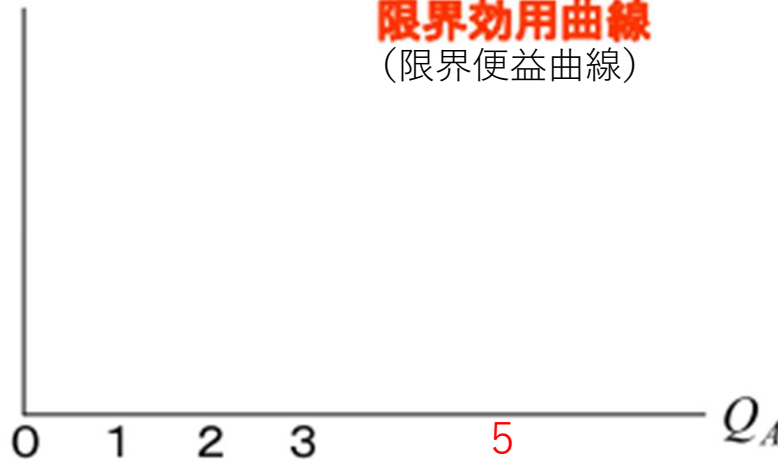


効用の増加分は？
 (限界便益MB)

- 0→1のとき
- 1→2のとき
- 2→3のとき
- ⋮

※ 秋葉・薮下・永田・若田部 (2000)
 『経済学入門』 (第1章) 東洋経済新報社 参照

(MB (限界便益))
MU(限界効用)



(例) 2つ目のとき

次の2つ目に対する追加的な
満足度(1→2の増加分)

||

金額的にみた時の2つ目に対する
Aさんの評価額

2つ目には()円
まで支払う意思がある

追加の1単位に対する買い手の
支払い意欲 (willingness to pay)

まとめ

買う量が増えていくと、Aさんの評価額は下がっていく

→ 限界効用曲線は()

限界効用理論
の前提

ここまでは「Aさん個人」についての行動。
「市場価格」を考慮したとき、最終的にいくつ買うのか？

評価額のほ
うが大きい
ので得

※ この例で、もしイセエビの市場価格 $P=1000$ 円ならば、

- ・ 2つ目を買うか？ 評価額 () 市場価格 1000円
- ・ 最終的に、 $P=1000$ 円ならば、いくつ買うのか？

考え方 自分の評価額と実際の価格とを比較して、「得」が続く限り、買い続ける
いくつまでならば、買う量を増やして行って、Aさんが得をするか？

1
つ
ず
つ
増
や
し
て
い
く

	(追加的なメリット)	VS	(追加的なコスト)	
	評価額(限界効用)		市場価格	一定 便益は？
1つ目	6000		($P=1000$ 円の時)	
2つ目			1000円	
3つ目			1000円	
:			1000円	
5つ目			1000円	
6つ目	900		1000円	-100円

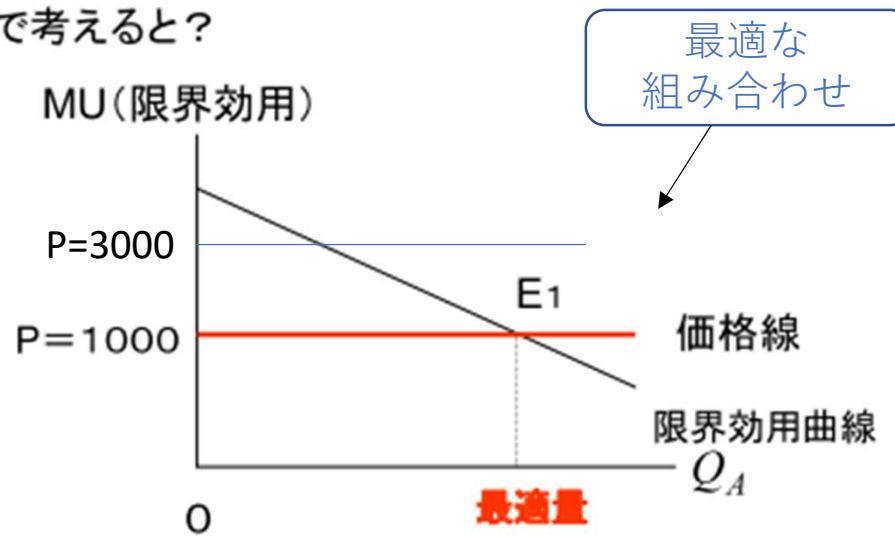
余剰が減少！

市場価格 < 評価額 (MU) ならば 「買う」

→ 余剰 (総便益) が最大になるところが最適な購入量

つまり、市場価格 $P=1000$ 円の時、
Aさんにとっての**最適な購入量**は $Q_A = (\quad)$

図で考えると？



もし、市場価格P=3000円ならばどうか？

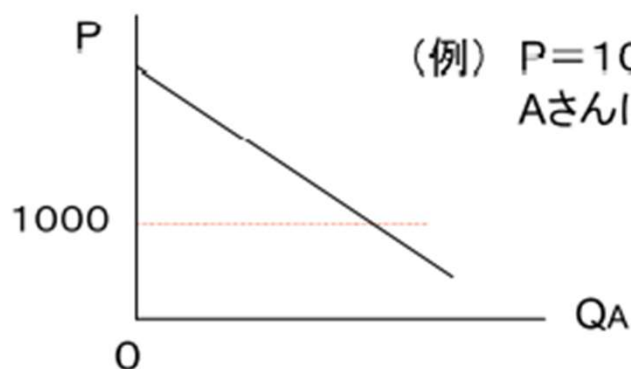
● 個別需要曲線

ある個人にとっての、**価格と購入量との最適な組み合わせ**を示した曲線

→ 縦軸を価格Pとすれば、限界効用曲線そのものになる

→ この理論(限界効用理論)では、需要曲線は必ず()になる

※ **消費者余剰** 最適な数量まで買い続けて、最終的に全体でどれだけ得をしたか



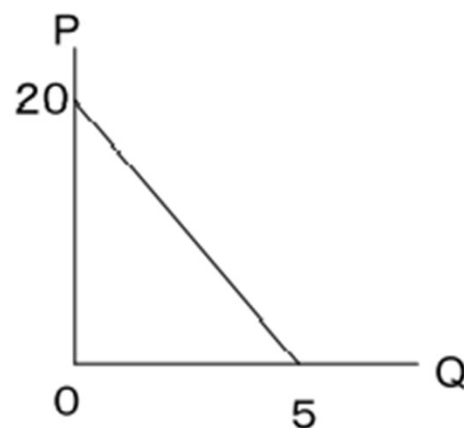
(例) $P=1000$ 円 で $Q=5$ のとき、
Aさんにとっての消費者余剰はどの部分か？

例題

※「経済学入門」(秋葉・藪下・永田・若田部 共著) 東洋経済新報社
より一部改題のうえ掲載

次の図は、ある個人のある財についての需要曲線を示している。

- (1) この個人の需要曲線を数式で表しなさい。
- (2) この個人が3単位の財を消費するのに
最高支払っても良いと考える評価額はいくらか。
- (3) 価格が $P=8$ のとき、需要量および消費者余剰は
いくらになるか。

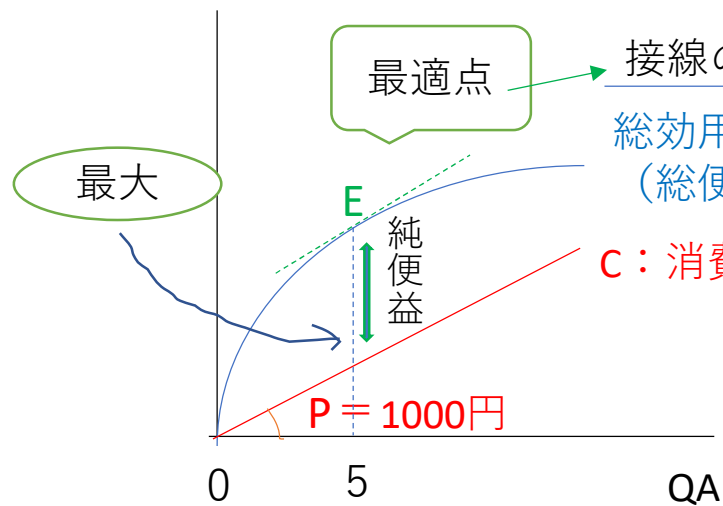


参考

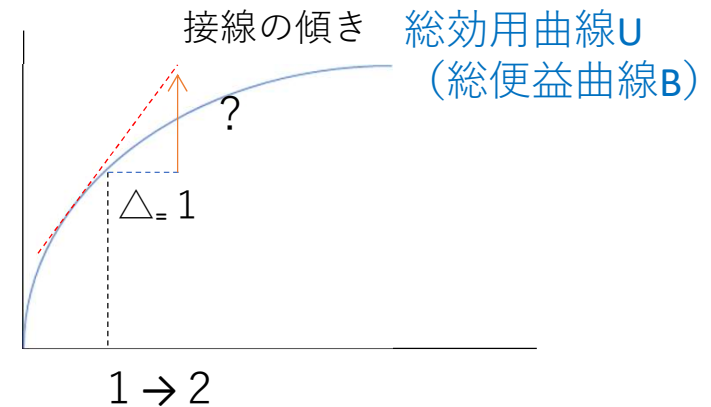
総効用曲線を用いた図による説明
(正確には・・・総便益曲線)

最適消費量の決定
 $P = MU$ (限界便益MB)

市場価格 $P = 1000$ 円 のとき



限界効用 MU
(限界便益 MB)

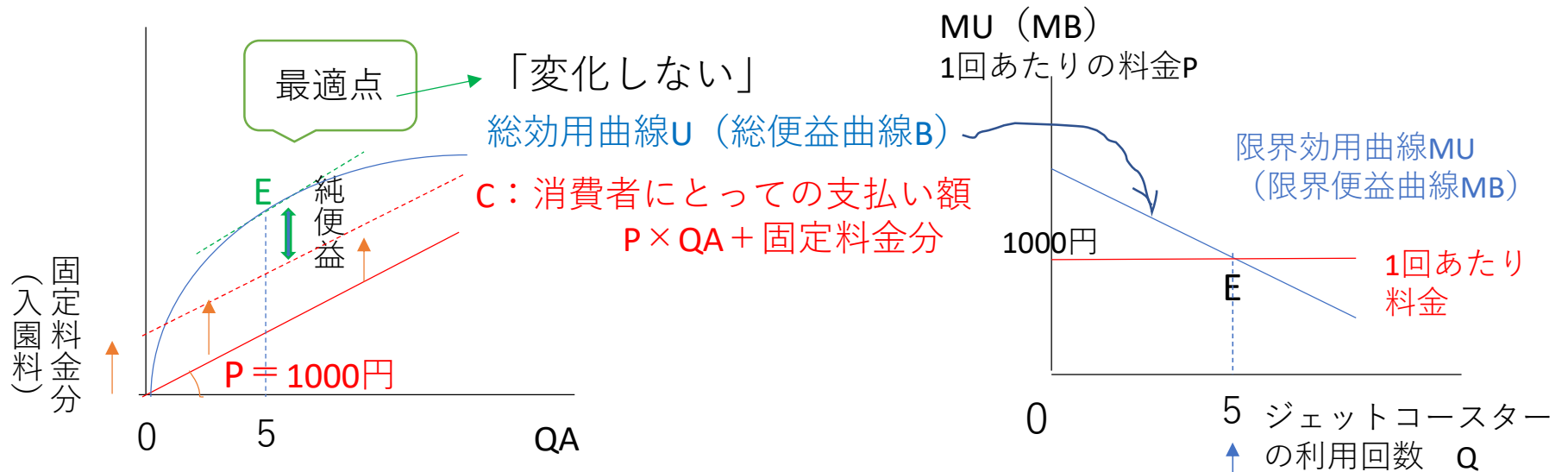
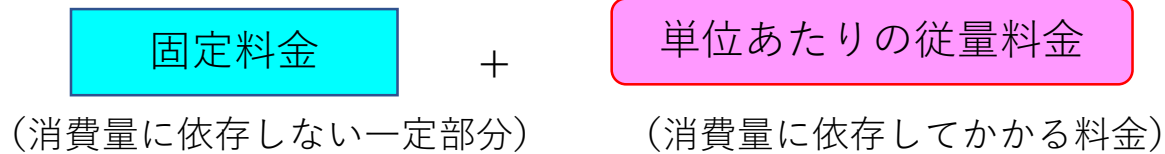


補論

消費者余剰分析の応用：「2部料金制」について
「入園料は暴利か？」

「2部料金制」がとられている例

電力、水道、電話、遊園地、会員制スポーツクラブ・・・



入園してくれるならば、固定料金分は最適消費量の決定には影響しない

→ 遊園地は固定料金分だけ収入が増える？

※ 秋葉・藪下・永田・若田部 (2000)
『経済学入門』 (第1章より) 東洋経済新報社

ただし・・・

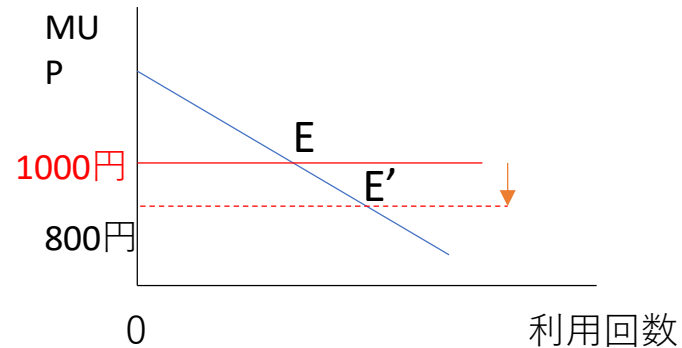
最終的な消費者余剰は、固定料金分だけ減少する



固定料金がないときの消費者余剰 > 固定料金 (入園料) → 入園する
< → 入園しない

もし、入園料はそのままでも、1回あたりの利用料金を引き下げると？

消費者余剰も増加するので、
結果として消費者も得をするかも？



固定料金によって遊園地（経営者）は収入を増やすことができる一方、
1回あたりの利用料金を引き下げてくれることで、結果として
消費者が得をする可能性もある